

[博士論文審査要旨]

申請者：佐々木 秀綱

論文題目 組織における権力者の心理：社会的勢力感の影響に関する実験研究

審査員 沼上 幹  
島貫 智行  
加藤 俊彦

本論文は、社会的勢力感が組織の意思決定者に及ぼす影響について実験手法による実証研究を行なった成果である。ここで社会的勢力感とは、自分が人に影響を及ぼせるという感覚、いわば権力を持っているという感覚である。本論文はその影響について、既存研究の丁寧なレビューを行なった上で、4つの実験を行なって実証的な知見を積み上げている。まず1つめの実験では、社会的勢力感が高まると人はリスク愛好的な選好を持つようになり、しかも直感にそった選択行動を取るようになるため、リスク愛好度の高い選択肢を選ぶようになることが確認されている。2つめの実験では、各種の認知バイアスに注目して、勢力感を高めると、人間は確証バイアスと連言錯誤（合接の誤謬）に陥る傾向が強くなることを明らかにしている。3つめの実験では、勢力感を高めると自らが属する集団内のメンバーに有利な判断（身びいき）をする傾向があることが見いだされている。これら3つの実験では、社会的勢力感の高まりが組織の意思決定者に浅慮のリスクテイキングを促し、確証バイアスに陥らせ、身びいきの意思決定をするという、権力のもつマイナスの側面が示されているのに対して、4番目の実験は権力を社会的に有用にコントロールする可能性を探っている。この実験では、勢力感の高まりと、公的問題についての当事者意識の高低の交互作用効果を確認し、勢力感が高まった人が公的な問題に当事者意識を強くもっていると、その問題の解決に献身的な傾向を示す、という傾向が見いだされている。

本論文の優れた点は、組織現象の最も重要な側面のひとつである権力現象に対して、経営学の領域では比較的希少な実験的手法を用いてアプローチしていることである。勢力感を高める実験操作や実験者へのブリーフィングと協力依頼など、実験的法の標準的な手順を遵守する実験計画を策定し、確実な知見を積み上げている点は大いに評価できる。また第2に、勢力感と当事者意識の実験に見られるように、既存研究の理論的なバックグラウンドを十分に活用しながら、交互作用効果を巧みに活用して興味深い知見を生み出している点も本論文の優れた点である。第3に、当事者意識を高めることで権力を向社会的な方向へ制御できることを示唆するなど、実験に基づく知見を巧みに経営へのインプリケーションにつなげている点を指摘できる。

このような優れた側面があるものの、本論文にも課題が残されている。勢力感を巡る実験を複数遂行しているものの、仮説に反した結果が得られた際に、その理由を解明する作業がやや一面的であるとか、同じ変数間関係について、確実な知識を求めて類似の実験を幾重にも積み重ねて実施するという執拗さが弱い点などはその1つである。しかしながら、実験を実施できる機会が非常に限られていることを考えれば、このような批判はやや過大な要求であり、しかも、このことは本論文が生み出している明確な貢献を打ち消すものではない。

よって、審査員一同は、所定の試験結果をあわせ考慮して、本論文の筆者が一橋大学学位規則第5条第1項の規定に準じた取扱により一橋大学博士（商学）の学位を受けるに値するものと判断する。